

文学学習のための創作活動の研究

— 『握手』の授業の場合—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 言語・社会科学系（国語）

市川 拓二

本研究は、創作活動を取り入れることが文学、特に物語の読解にどのような影響が出るかについて、中学3年生を対象に、『握手』という学習教材を用いて、実践的に研究するものである。

登場人物への没入経験に終始してしまう読みや、物語言説を分析しその機能や効果の確認に終始する段階で停滞してしまう生徒に、語り手の機能を自覚しながら、作品を読解できるようになるために、物語行為者である「語り手」に着目しやすくなるような課題と、その課題について物語を創作する活動を取り入れることで、作品をどれだけ理解しているかを学習者が自覚しやすくなり、作品の構成性を理解した上で読むことができるようになったり、捉えた物語言説の機能や効果を踏まえ、語り手の意図を踏まえて登場人物の心情を理解したりすることができた。

今後は、他の文学教材でも有効に機能するための一般化された方略や指導方法について模索していきたい。